

川 合 遺 跡

発掘調査報告書

岐阜県教育委員会
可児町教育委員会



① 川合遺跡

② 宮之脇遺跡

③ 牧野小山遺跡

序

岐阜県可児郡可児町川合地内には、以前から古墳・住居址などが散在する埋蔵文化財包蔵地として知られていた。

一般県道七宗・可児線がこの地域を縦断して建設されることになり、県教育委員会文化課と協議を重ねた結果、建設区域を対象に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

今回の発掘調査には、日本考古学協会員大江侔氏を主任調査員とし、岐阜県考古学会員中島勝国氏・大江上氏を調査員としてお願いした。調査が学術的な成果をあげて完了出来たことは、猛暑の中を努力された調査員をはじめ、直接作業に携われた地元の方々や、町文化財審議委員、その他の関係機関の各位、財的援助を煩わした県土木部（加茂土木事務所）のご協力の賜物と心から謝意を表するとともに、ここに貴重な資料をまとめて報告書として刊行することが、今後の研究資料となれば幸いである。

本報告書の作成にあたって、主任調査員大江侔氏をはじめ、中島勝国、大江上、稲垣雄之助諸氏に労をわずらわしたことを付記して感謝の意を表します。

昭和53年3月

可 児 町 長 林 桂

例 言

○岐阜県可児郡可児町川合地区，埋蔵文化財川合遺跡地内に，一般県道七宗・可児線が建設されることになったため，岐阜県教育委員会の委託を受けて昭和48年5月より昭和49年3月までの期間にわたって調査を行なった報告書である。

○発掘調査団の構成は下記の通りである。

団 長	林 桂	
県 文 化 課	波 多 野 寿 勝	
主任 調 査 員	大 江 命	
調 査 員	中 島 勝 国	
"	"	
調 査 補 助 員	大 江 上	可 児 貞 子
	可 児 鋼 平	可 児 貞 子
	大 森 寿 子	
教 育 委 員	佐 藤 納 平	丹 羽 利 男
	堀 井 丑 男	奥 村 一 美
	可 児 恒 三	渡 辺 登
	金 子 数 雄	奥 村 智 咲
文化財審議委員	金 子 一 郎	森 川 益 三
	日 比 野 義 博	稲 垣 雄 之 助
	岡 部 基 則	上 野 晃 司
	奥 谷 一 勝	続 木 正
事 務 局 長	只 腰 左 門	
事 務 担 当	堀 純 宝	小 沢 末 広
	安 藤 寿 作	吉 田 利 世 子
	田 口 茂	

○文中のタはグリットを表わす。

○土師式土器と須恵器の遺物分類表中の備考欄の住第1～8は，住居址番号を表わす。

○本書に記載した空中写真は，建設省国土地理院長の承認を得て2万分の1空中写真を複製したものである。

(承認番号)「昭和51部復第212号」

目 次

巻頭口絵	遺跡付近の空中写真	
序		
例	言	
まえがき		4
遺跡の地形と概要		5
発掘調査に至る経過		6
層序と出土状態		7
住居址遺構		10
出土遺物		17
	縄文式土器・弥生式土器・土師式土器と須恵器・石器・土製品	
江戸後期・明治の出土遺物		28
	出土遺物について・染付種類・考察	
結	語	34
図	版	39

挿 図 目 次

挿図1	遺跡付近の地形図	5
挿図2	第1地点遺構関連図及び土層図	8
挿図3	第2地点遺構関連図及び土層図	9
挿図4	第1号住居址実測図	10
挿図5	第2.3号住居址実測図	12
挿図6	第4.5号住居址実測図	13
挿図7	第6.7号住居址実測図	14
挿図8	第8号住居址土層図及び住居址実測図	15
挿図9	土器実測図	21
挿図10	土器実測図	22
挿図11	土器実測図	23
挿図12	土器実測図	24
挿図13	土器・石器実測図	25
挿図14	砥石実測図	26
挿図15	土製品実測図	27
挿図16	陶磁器実測図	30
挿図17	陶器実測図	31
挿図18	徳利底部墨書写真	33

図 版 目 次

図版1	発掘以前の遺跡全景 発掘調査中の状況 第1地点C11の層序
図版2	第1号住居址全景 第2.3号住居址全景
図版3	第4.5号住居址全景 第6号住居址全景 第7号住居址全景
図版4	第4号住居址カマド付近の発掘の出土状態 第5号住居址の陶磁器片の出土状態 第8号住居址の甕の出土状態 砥石の出土状態
図版5	出土土器(土師式土器)
図版6	出土土器(土師式土器)
図版7	石鏃・石錘・砥石・土製品
図版8	細形角状脚台・縄文式・弥生式土器片
図版9	陶磁器片
図版10	陶磁器片

ま え が き

一般県道七宗可児線の建設路線の中に遺物包含層が含まれていることが県教育委員会と可児町教育委員会により確認され、その路線内を発掘調査することになり、別記の調査団によって昭和48年5月16日より8月7日まで調査を実施したのである。この川合地内の木曾川沿い地域を調査期間中に踏査して見ると全域に亘って遺物の縄文式土器、弥生式土器、須恵器、山茶碗など遺物が表面に散在している。大正時代にこれ等の地域が開墾され、多くの塚が煙滅していたことが地元の人々の話しによって知られる、これ等を総合して考えると当時この地帯が、文化の中心的性格を有していたことが知られる。

また地理学的に見ても木曾川と飛騨川の合流点の左岸であって、美濃加茂可児盆地の重要な地点である事は当然であろう。それに対岸の地点において昭和47年度同じ県道七宗可児線建設地内に当る対岸の牧野小山遺跡の調査が行なわれ、その成果が発表されている点などと合わせて考えても、対岸の文化との関連においても重要な地点である。更に江戸時代に至っては、木曾川を利用し船によって可児・多治見などの焼物を各地に送る交易路の基点としても歴史的な役割りを有する地点であって、今回の調査によって江戸後期の陶磁器類の荷ぐずれ器の捨場が確認されたのである。東山道、中仙道等の道沿いでもある。

更に昭和14年には関西電力の今渡ダムが建設されている。縄文時代より今日に至るまでかかる歴史的景観の中にある重要な地域である。ここで我々は常にダム以前の過去、自然景観の中にはつ入して色々調査考察を進めねばならぬことは言うまでもない。この発掘調査及び報告書の作成に当っては、可児町教育委員会の諸氏を始め紅村弘、吉田英敏、松田典夫、野村宗作その他多くの諸氏の協力、御教示を得たことを記して御礼申し上げます。

調査は対象地域内に4m×4mグリッドを設定し、基本として千鳥状調査を進め、遺構の検出された地点を拡張して遺構の追求を行なったのである。その結果8基の住居址及び溝状遺構、江戸末期より明治初年の陶商の荷ぐずれ品の捨場などが検出されたのである。

(大江 命)

遺跡の地形と概要

川合遺跡は、岐阜県可児郡可児町大字川合字東畑に所在する。

可児町は、岐阜市の東方約30kmのところに位置し、東は同郡御嵩町、南は多治見・土岐の両市に、北は木曾川をはさんで美濃加茂市と、西は愛知県犬山市と接している。

可児町川合は、美濃加茂盆地のほぼ中央にあって、木曾川と飛騨川との合流点の左岸にある。美濃加茂盆地は、中央を木曾川が西流し、それに上述の飛騨川をはじめ、可児川・加茂川などの中小河川が合流している。木曾川をはじめとしてそれらの河川の開折によって数段の河岸段丘が発達している。この河岸段丘は、木曾川左岸の可児郡においては、標高120m程の高位段丘、標高100m程の中位段丘、標高80m内外の低位段丘の三段に大別される。

川合地区は、低位段丘の高位よりの第2面^{注1}にあって、標高は、85m内外である。木曾川との比高は約20mで、段丘崖となっている。遺跡の近くの青木神社裏より少し下ったところの段丘崖に、年中涸れることのない相当量の湧水がある。

今回の発掘地点は、広く平坦なる面で、表土はいわゆる御岳泥流の堆積物が腐食土化した通称「黒ぼこ」と呼ばれている黒土層である。

段丘崖から10mほどの地点では、大体、35cm～60cmの黒土層の下に砂礫層となっているが、段丘崖より50mほどはなれた地点では、35cm～45cmの黒土層、50cmほどのシルト質砂層それにつづいて砂礫層となっている^{注2}。

発掘地点の土地利用は、畑地として、調査直前では、野菜・里芋・杉・松等の栽培がおこなわれていた。
(中島勝国)

挿図1 遺跡付近の地形図



注1. 低位段丘は5段に細分化される。

注2. 建築にともなうボーリング調査結果より。

参考文献 関道明「美濃加茂盆地の段丘、とくに中位段丘とその堆積物」——名古屋地学第25号
岐阜県・愛知県「飛騨・木曾川自然公園調査書」—1960—

発掘調査に至る経過

以前から古墳や遺物包含地などの遺跡が多数存在することで、岐阜県可児郡可児町川合地区は周知されていた。

この川合地区に、一般県道七宗、可児線の建設が計画された。計画路線に係る岐阜県可児郡可児町川合字東畑付近は、遺物包含地として川合遺跡が存在するところであった。そこで、この遺跡の保護について関係者間で協議を重ねた結果、建設対象区域の記録保存を図るために事前に発掘調査を行なうことになった。

昭和48年3月に県文化課と協議したところ、調査は昭和48年5月より行なうことになった。日本考古学協会員大江侗氏を主任調査員、岐阜県考古学協会員中島勝国氏・大江上氏を調査員とする調査団を構成して実施することになり、その結果は次のとおりである。

川合遺跡発掘日誌抄

5月3日 川合遺跡の発掘調査予定地を下見し、道路予定地付近の畑の表探を行なう。**12日** 現場の全景写真を撮る。**13日** 調査地点を設定、杭打ち及び除草作業を行なう。発掘調査以前の遺跡の全景写真を撮る。**15日** 県道工事事務所より打合わせに現場に来られる。調査地点の平面図を作る。**16日** 晴 本日より発掘調査を実施するに当たって大江主任調査員によって起工式を行なう。A2.3g, C3gの表土除去を行なう。**17日** A4.6.8g, C3.5gの表土はねをする。小破片の土器が少量出土する。**18日～19日** 除草の残りの分を掘る。表土層の除去を行なう。A12g付近より陶磁器片が出土する。**21日** A12gを中心とした地点に陶磁器が多量に出土する。これは江戸末期より明治初年に亘ってこの川合の地に陶器の間屋が存在していて、集荷時の荷ぐずれ品が捨てられた場所であったことを示す。A6gからは土師器の口縁部が出土した。**24日** C11.12gより出土の土師器の実測図をとる。**6月3日** 第2発掘現場を設定して杭打ち作業をする。**4日** C5g表探より石鏝が出土した。**5日** 教育委員発掘現場を視察する。**7日** C2gから土鍾が出土する。**9日** C2gより土鍾・山茶碗が出土する。A10gからは石斧、石鍾が出土する。**14日** B3gより砥石出土。**16日** C3gより土師器の完型品が出土する。**7月10日** 県文化課より発掘現場の視察に来町。**22日** 川合遺跡の現場における発掘作業を終了し、引き続いて住居址の平面図、断面図をとる作業を行ない。**8月7日** までに測量作業を終了する。**23日** 整理作業を開始する。出土品の水洗い、遺物番号の記入、計測、復元の作業を**10月8日**まで行なう。その後引き続いて**3月**まで土器の復元、計測、実測図作成、トレス、遺物の写真撮影、原稿作成などの作業を行なった。(可児銅平)

層序と出土状態

層序

遺跡は大正時代以降に開墾作業が行なわれた地点で、ほぼ平坦に近い状態であり、発掘調査前における第1地点のA1号の地点は85.96mである。第2地点はA2号85.70mであり、第1、第2地点ではほとんど比高差がない。

さて層序は表土層（褐色土）の下に黒褐色土層があり、その下部が黄色シルト砂層で、その下に礫層が存在するが、遺構はこの第3層の黄色シルト砂層を基盤として構築されているのである。かなり色々な時期の攪乱があり、層序は一定しない黄色シルト層の混った攪乱層もある。

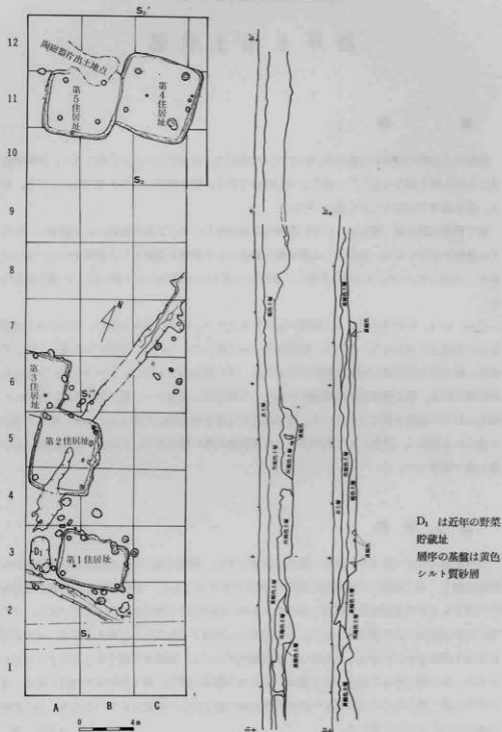
C10、C11、C12号の両側の土層図に見られるように、第5住居址の場合、黄色シルト砂層の上に黄褐色土層があり、その上に黒褐色層、表土層となっている。遺構のある場合、第1住居址の層も第5住居址と同様な層序が見られる。その他の場合も多少の差があるが、同様な層序が見られる。第6住居址の陶磁器片の出土した地点は、黄色シルト質で掘込まれ、遺構の一部をこわして遺物が捨てられている。第2地点でも第6号住居址の場合は、A6、B6の構内に見られる層位は、黄色シルト質砂質の上に黄褐色の薄い層があり、その上に黒褐色層、表土層の順で堆積している。

出土状態

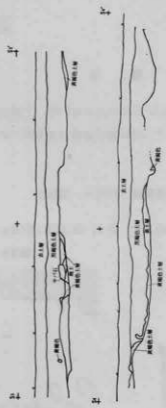
出土状態は第1～第4号、第6～第8号住居址では、実際に耐え得る土師器及び須恵器が住居址の覆土、特に床面上の黄褐色土層中に検出されたのである。また住居址と関連する建物中、第3.4.7.8号住居址の土師器は床面及び5cm～10cm上の土層中より出土しているが、これ等の土器は復元により接合するので、その住居址に関連するものとして考えられる。また須恵器は第1住居址中より出土したものは、比較的完形に近く、床面及び覆土中より出土したものである。また覆土中より出土した土雑は、その出土地点が第2、第8住居址の地点である。また尖底土器と思われるものが第1～第3号住居址の覆土中心に限定されている点も、出土状態のありかたとして注目される。

(大江 命)

挿図2 第1地点遺構関連図及び土層図



挿図3 第2地点遺構関連図及び土層図



D₁D₂ は近年の野菜貯蔵址
 D₄ は攪乱層 (年代不明)
 層序の基盤は黄色シルト質

遺 構

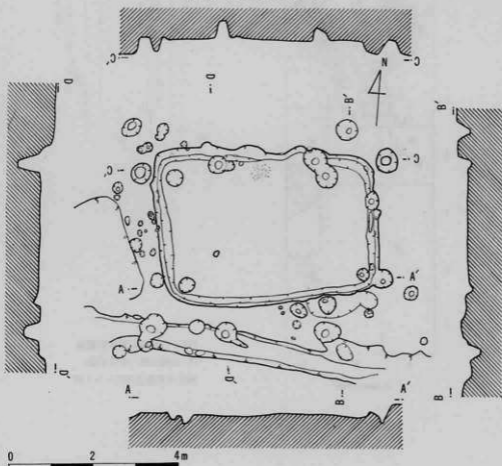
住 居 址

第1地点、第2地点において、土師式土器、須恵器、砥石などを伴う8基の住居址が検出された。その外に溝状遺構が2カ所、ピットが1カ所検出されたのである。

第1号住居址 (挿図4、図版2)

第1地点A2、B2、B3内に検出され、東西に長軸を置く約520cm×340cmの隅円長方形の

挿図4 第1号住居址実測図



竪穴であり、地山面を約20cm～35cm掘り下げて床面が作られている。壁に沿って周溝が検出された。家屋内に柱穴6本があり、内でも北壁寄りに補助柱あるいは建替時における柱の位置の移動と推察される。南東の隅に壁に張出した柱穴が見られる。また住居外に多くのピットが検出された。特に南・西の屋外に多くのピットが検出された。また北壁の中心部より、やや西の部分に焼土がかすかに認められた。その付近床面にも焼土のカタマリが見られ、更に須恵器片及び土師器片が検出されたのである。挿図9の1.2.3.4.5.の須恵器、同図6～9の土師器及び細形角状脚台に類似するもの及び砥石が出土している。これ等の遺物よりして、多少遺物中に先後関係が考えられるが7世紀後葉の時期と推察出来る。

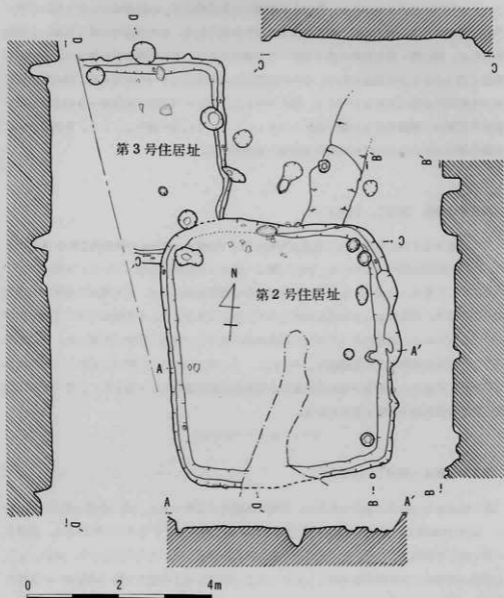
第2号住居址 (挿図5, 図版2)

第1地点A 4.5内に検出され、南北に長軸を置く約560cm×500cmの隅円長方形の竪穴であり、地山を約30cm掘り込んでいる。西北の隅の一部で3号住居址を切っている。南壁の一部に内外に亘って掘込みが見られる。この部分は後世の擾乱が見られる。この部分と重複した部分の一部を除き、壁面に沿って周溝が検出された。柱穴は6本あり、また壁面上部に7cm～15cmの小穴が見られる。北壁にそった部分に長径45cmの焼けた川原石及び焼土が見られ、その上部及びその付近の床面の上に土師器片が見られた。この部分がカマドと推察される。土器片は甕の胴部破片である。土鍾及びその中に細形角状脚台の類似遺物なども含まれている。この住居址も第1号住居址と同時と考えられる。

第3号住居址 (挿図5, 図版2)

第1地点A 6の地点に検出されたが、西側は区域外で未掘である。竪穴住居は南北に約440cm。東西は250cmまで知られるが、西にどれだけ延びて壁が存在するかは不明である。南東の一部を除いて検出された壁にそって周溝が見られた。壁面上部に小穴が見られた。床面上より土師器の復元による完形土器が出土したのである。住居址出土の完形土器(挿図10)の器形及び底部の平底で凹が残っている点などより第1号住居址より、やや先行する時期と考えられる。

挿図5 第2,3号住居址実測図



第4号住居址 (挿図6, 図版3)

第1地点B11.12, C11.12内に検出された。南北に約580cm, 東西に約600cmのほぼ隅丸正方形のプランを示すものである。東, 南, 北の壁は黄色シルト質砂層を約20cm程掘込んでいる。

西壁の一部は第5号住居址によって切られている。北壁の一部を除いて周溝が知られる。北壁のほぼ中央部の部分にカマドの位置が推察される焼土の残存が少量認められたのと、その付近の床面が焼けている。土師器の甕が、二個体分がカマド附近の床面上および約10cm程上部覆土中より出土した。

柱穴は主柱が4コ検出された外に東壁沿いに3カ所と床面の中心よりやや西に1カ所小ピットが検出されたのである。遺物よりして、器形が胴長化するがまた胴部の張が完全に退化しない器形を示す(挿図10の3)また同図4の甕など、その他の遺物を総合して第1号住居址の後に続く7世紀末～8世紀初頭時期に当たると考えられる。

第5号住居址 (挿図6 図版3)

A11, B11の9を中心にして検出された。東壁は第4号住居址を切りわずかに壁の立上りが知られる。東壁の一部より南壁および西壁及び北壁の一部が黄色シルト質砂層を約30cm掘り込んだ。東西約540cm南北は推定約450cmの隅丸方形の住居址である。

東壁の南部より南壁・西壁・北壁の一部に亘って周溝を有し、柱穴は主柱4本と南壁沿いの周溝の所に補助柱と考えられるものが検出された。またカマドの跡は明瞭でないが、西壁のほぼ中央部の壁の立上った所に小石が約30個ほど検出され、その小石が焼けたり、黒く炭素が付着している状態で検出されたが、カマド跡と推定するほどの積極的な資料とは考えられない。時期を決定する資料は無いが切合の関係より、第4号住居址以後である。また北壁の部分に近世陶器の捨場の穴が掘られている。

挿図6 第4.5住居址実測図

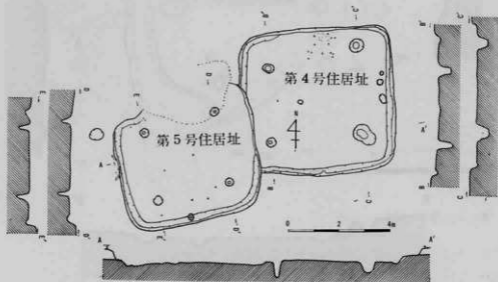
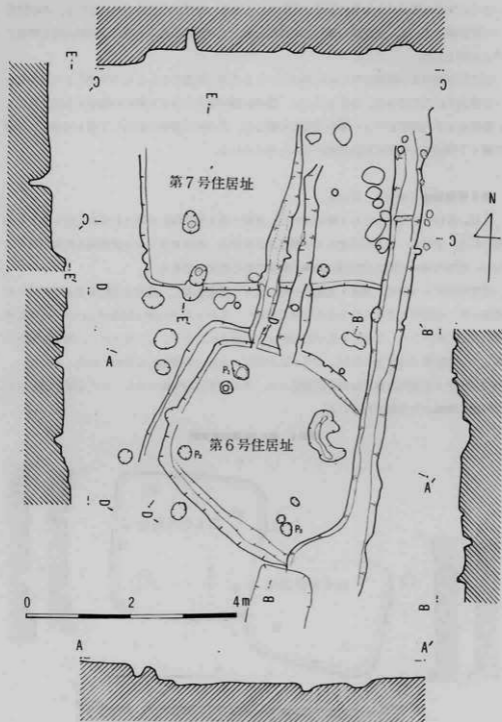


插图7 第6.7住居址实测图

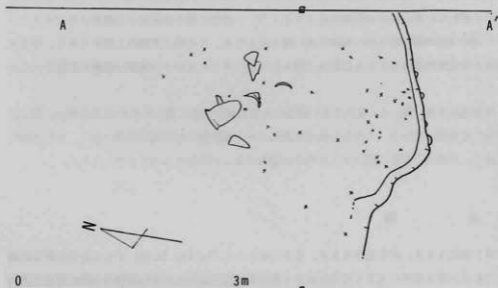


第6号住居址 (挿図7, 図版3)

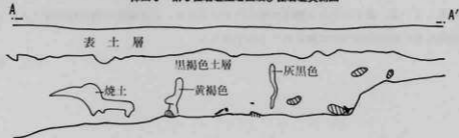
第2地点の6A 9を中心とした地点に検出されたが、遺構の保存状態があまり良好でなく、また溝状の遺構によってプランの全体を知ることが出来ない。南壁・西壁・北壁が検出され、更に西壁ではそれに沿って段を有する掘り込みが検出されたが、住居の建替かたによるのか、縁を有する住居址か不明である。周溝は南壁沿に見られる。柱穴は6カ所検出された。主柱はP₁, P₂, P₃である。挿図11の1の土師器と住居址の西南の壁に検出された砥石(挿図14の1)のみであるが7~8世紀の時期と考えられる。

第7号住居址 (挿図7, 図版3)

第2地点A 7, A 8の9に検出されたが、溝などが縦横に多くのピットが見られ、木曾川に近いせいか台地よりの流土がはげしく、そのためか遺存状態が悪く南壁と西壁が検出されたのみである。この住居址の柱穴と思われる3カ所見られる。遺物は挿図11の2・3の土師器のみであると遺存状態よりして時期は7~8世紀のいずれか決めがたい。



挿図8 第6住居址土層図及び住居址実測図



第8号住居址 (挿図8)

第2地点の2Cの地点に住居址の壁面と思われる掘り込みが見られたが、プランは明瞭でなく、西壁の部分がなく東部のセクション断面には住居址の掘り込みの断面が見察される。この掘り込み中よりは瓦破片が多く出土している。

また北壁の部分に大きなピットが見られる。その掘り込みの時にカマドがこわされ、赤色焼土が断面に混在していた。遺物は多く出土しているがその中で挿図11の5・6など胴長化される時期であり、挿図11の又5の様に底部も丸底になって来ている。8世紀の時期と推定される。

溝状遺構

第1地点は第1住居址の南に幅約120cm 深さ35~50cmの溝状遺構が検出されたが、溝の北壁部がくずれているため保存状態はあまりよくない。次第に第2住居址の北壁部よりC8gにかけて100~120cm幅の深さ10~20cmの浅い溝が見られる。この溝は黄褐色土層中であり、第2住居址との先後関係はあたかも住居址で切られた様に見られるがその関係は明瞭に把握されなかった。

第2地点はA, B, C, 5.6.7.8の地点に五条の溝が南北に見られるが第6住居址、第7住居址などを切っている。これらの地点は黄色シルト質砂層のため保存状態が悪く、また木曾川に近く、木曾川の左岸の段丘上より陸水の流入によって出来たものとも考えられる。

土 壌

第1地点A3g, 第2地点A5g, B5に見られるD₁, D₂, D₃はいずれも近世の野菜貯蔵址である。第2地点にC3.4に見られる土壌は第8住居址がこわされ直径約300cm程の不規則な掘込みであり、その上部にはカマドに使用された焼土が混入していた。また須恵器、土師器片も混入している。表土の上から攪乱が見られているので、住居廃絶の後に何の時代か決めたがいかなるかの目的のために掘られたものであろう。

(大江 命)

出土遺物

出土遺物は土師器と須恵器を主体とし、その他縄文時代の遺物、弥生時代、鎌倉時代（山茶碗）、江戸明治に亘る陶磁器が出土している。

これ等の遺物中実用に耐えうる遺物及び遺構に関係のあるものを中心として記述する。

縄文式土器

縄文式時代早期の押型文土器に属するものが4点出土している。

楕円文（挿図13の1）

(1) 押型式楕円文で粒位は長辺約0.6cm、短辺約0.4cmで、色調は淡黄褐色で器厚約0.7cmである。

格子目文（挿図13の2）

同図2は縦位に施文されたものである。色調は黄褐色で器厚は約0.7cmである。

変形押型文（挿図13の3、4）

同図3は色調は表面が黒褐色で、裏面は淡黄褐色である。器厚は約0.7cmである。^{注1}

同図4は長目のタイプのもので、器厚は約1.1cm、色調は淡黄色。

注1. 澁田正一、岩野見司「川路萩平（C地点）遺跡発掘報告書」新城市教育委員会1965。

弥生式土器（挿図13の5～8）

弥生式に属するものが2点出土している。

(1) 口端部に斜位の条痕文を施し、それより下部は横位に条痕文を施している。口唇部は比較的厚みを持ち、丸味をおびている。器内部は4～5の列点文を斜位に施し、その下部に横に三条の列点文が押し手法を用いて施してある。貝田町式の深鉢型土器の小破片と考えられる。色調は土器表面が淡黄褐色で内部は黒ずんでいる。この土器は貝田町式に比定されるものである。

(2) 胴部と考えられる土器片で、羽状条痕文を有し、器厚は約0.5cmで色調は茶褐色である。

（大江 上）

土師式土器と須恵器

器種	挿図及び 図版番号	寸法	器形の特徴	備考
須恵器 坏身	挿 9の1 図6	口径14cm 高さ4.1cm	胴部が底部より鋭く立ち上るもので、口端部は丸味をもつ。底部に短かい外にふんばる高台を有する。底部の中心は台部の端面より下る。	黄褐色、生焼 住第1
須恵器 蓋	挿 9の2	口径10.5cm 高さ3.2cm	口縁部は外に開き端部は丸味を持つ、内傾し天井部の上部は平らで、天井部と口縁部の境に稜を持っている。	10分の7の破片、灰黒色、天井部へう割り成形住第1
須恵器 蓋	挿 9の3	口径10.3cm 高さ2.6cm	天井部に宝珠ツマミをもち、口縁内部に返りを持つものであり、その返りの部分が口縁端より下にのびている。	2分1の破片、灰色、自然釉 住第1
須恵器 蓋	挿 9の4	口径11.1cm 高さ3cm	天井部に宝珠ツマミを持ち、口縁部内面に低い返りを持つものである。	完形、外面灰色内面褐色、焼成良好
須恵器 蓋	挿 9の5	口径22cm 残存高5.4cm	短い口縁部が外反しながら立ち上り口縁部で内反してその部分に稜を持ち、口端部は鋭く、頸部と胴部の境の処に段を持つものである。	黄白色、焼成不充分、胴部内外面に印文見られる
土師器 甕	挿 9の6 図5	口径12.3cm 残存高4.5cm	口縁部は外反し、端部は面取りされている。胴部と口縁部の間に約1cm中の頸部を明瞭に持つもので、器厚は厚く、胴部に刷毛目を施す。	淡褐色、胎土は良好である。 住第1
土師器 甕	挿 9の7,8	(7)口径13.5cm 残存高9.2cm (8)口径16cm 残存高2.5cm	口縁部が大きく外反し、口端が面取りされている。胴部の最大径と口径とがほぼ同じ器形を示すものであり、器面胴部の斜めに刷毛目を施す。口縁内面に刷毛目を施す。	7.褐色、8.黒褐色、口縁部は8の方がやや長い。 住第1
土師器 甕	挿 9の9	口径13cm 残存高8.5cm	口縁部は「く」字状に外反し、口端は丸く、口縁部より胴部にかけて刷毛目を施す。内面は口縁内部は横に刷毛目が施されている。	黒褐色、胎土雲母を含む。 住第1
土師器 甕	挿 9の10	口径14.7cm 残存高5cm	口縁部が外反しながら開き、頸部にわずかに段を示す。胴部は張らない器形である。磨毛度が大いなが刷毛目が胴部にみられる。口縁内面は横に刷毛目が施されている。	淡褐色である。胎土砂を含む。 住第3
土師器 甕	挿 9の11	口径30cm 残存高9.5cm	口縁部は外反し口端近くで内反し、口端は鋭くまとめている。胴部は斜めに刷毛目が施され、口縁部は横ナゲ調整をし、口縁内面より胴部に横に刷毛目が施されている。	黄褐色、胎土雲母及び少量砂を含む。 住第3
土師器 飯把手	挿 9の12 13		把手の部分のみの破片	黄褐色 住第1
土師器 甕	挿 9の14	口径20cm 残存高4.6cm	短い口縁部が「く」字状に開き、端面を面取りし、やや丸味を持っている。胴部は張り、器面は刷毛目が施され、口縁部内面も刷毛目が施されている。	黄褐色、良質の粘土で、胴部は薄手に成形されている。 住第4

土師器 壺	挿 10の1 図5-1	口径16.7cm 高さ29.8cm	口縁部が大きく外反し、端面を面取りしやや丸くまとめ、胴部の中央部で口径より大きく玉子状に張り出している。底部はやや凹状に上がっている。胴部は斜めに刷毛目が施されている。口縁内部はかすかに横に刷毛目が見られる。	黒褐色 住第3
土師器 壺	挿 10の2	口径17.5cm 残存高17.2cm	口縁部は「く」字状を示し、端面はやや内反し面取りされさらに粘土の折り返しが見られる。胴部は斜めに刷毛目が施され、内面は頸部より口縁に横に刷毛目が見られる。	黒灰色、砂泥りの胎土。
土師器 壺	挿 10の3 図5	口径18.4cm 残存高29.5cm	口縁部が短く「く」字状をなし、端面が面取りされている。胴部が口径よりやや張る器形で胴部に細かい刷毛目が施される。口縁内面の部は横ナデに刷毛目が施されている。	淡褐色、カマドと推定される付近の床面より出土したものである。胎土は良質の粘土を使用。 住第4
土師器 壺	挿 10の5 図6	口径14cm 残存高5.5cm	口縁部が「く」字状に外反し、端面が面取りされ稜をなし、胴部は横に刷毛目が施されている。口縁内部は横に刷毛目が施されている。	淡褐色、胎土良好。
土師器 壺	挿 10の6 図6	口径16.8cm 残存高7.3cm	口縁部が「く」字状に外反し、端面が面取りされ、胴部が口径より張り出す器形で、口縁部横、胴部は斜めに刷毛目が施されている。内面は胴部上部より上に横ナデされている。	淡褐色
土師器 壺	挿 10の7 図6	残存高8.3cm	底部は平らで、胴部との境は丸味を持っている。	茶褐色 住第4
須恵器 瓶	挿 10の4 図6	口径25cm 残存高13.5cm	口縁部が大きく外折し、端面が丸くおさめ胴部は逆「ハ」字状をなし、胴部に把手がつくものであり、胴部に刷毛目が施されている。口縁頸部内面にも刷毛目が施されている。	黒褐色、内面よく調整されている。 住第4
土師器 壺	挿 11の1	口径20.5cm 残存高5cm	口縁部が丸味をもって外反し、口縁部が面取りされ垂直になる。胴部と口縁の境がわずかに肩を持つ。胴部は斜めに刷毛目が見られる。口縁内面横に荒い刷毛目がかすかに見られる。	黄褐色、胎土に砂粒を含む。 住第6
土師器 壺	挿 11の2 図6	口径13.5cm 高さ17.1cm	口縁部の立ち上りが急で、端面を鋭く、器厚は厚く、胴部は張り出している。器面の調整が悪く凹凸が見られる。縦に刷毛目が施されている。底部は平らである。	黒褐色、胎土砂粒を含む。底部はあり、復元図のようになる。 住第7
土師器 壺	挿 11の3 図6	口径12.8cm 残存高4.6cm	口縁部がやや外反しながらほぼ垂直に立ち上っている。口縁部が面取りがされ、胴部は斜めに刷毛目が施され、内面は胴部に横に刷毛目が見られる。	黒褐色 住第7
土師器 壺	挿 11の5 図5	口径19cm 高さ37cm	口縁部が外反し、折り返るのが見られる。胴部はゆるいカーブを示しながら底部に至り、底部も丸く胴長の器形を示すものである。胴部は縦に内面は口縁部より横に刷毛目が施されている。	褐色、胎土砂粒を含む。 住第8

土師器 壺	挿 11の6 図5	口径18cm 高さ33.8cm	口縁部が短く「く」字状に外反し、端面が面取りされ立ち上り稜をなすものである。胴部の上部に最大径をもつ器形で、器面の胴部斜めに内面口縁部、胴部上部に横に刷毛目を施す。	黄褐色 住第8
土師器 壺	挿 11の4	口径27.7cm 残存高14.5cm	口縁部が短かく「く」字状に外反し、肩の張った器形をなす。胴部は斜めに、内面口縁部横に刷毛目が施されている。	黄褐色、胎土は砂粒を含む。 住第8
土師器 壺	挿 12の1	口径12.5cm 残存高6.5cm	口縁部が大きく開き、端面は丸味をもっておさめている。器面は胴部縦に、内面は口縁部のみ横に刷毛目が施されている。	灰白色 住第8
碗形 土器	挿 12の2	口径15cm 高さ3.7cm	丸底の底部で外反する体部で、口縁部が更に外折する。工具によって器面調整を施す。	外面黒褐色、内面褐色、底部木葉痕、焼成良好。
須恵器 杯蓋	挿 12の3	口径10.4cm 高さ3.1cm	天井部頂部は扁平で、口縁部と天井部との境にわずかに稜を有し、口縁部はほぼ垂直で、端部は鋭くおさめている。	ヘラ削り成形が見られる。 黄灰色。 住第8
須恵器 無蓋 高杯	挿 12の4	口径14.3cm 残存高7cm	脚部失している。口縁部はやや内反しながら凹を示している。底部と胴部の境に沈線が見られる。口縁内部に段を持っている。	 住第8
須恵器 高杯 脚部	挿 12の5	残存高5.5cm	ラップ状に開く裾部で、端面は垂直に下に短かくのびている。裾部と脚部の境に二条の沈線が引かれている。	灰色、微砂を含む。
須恵器 脚部	挿 12の6	残存高2cm	破片である。透がある。	鼠色
須恵器 杯身	挿 12の7 図6	口径13.3cm 高さ3.7cm	高台のあるもので、体部及び口縁部は外反して立ち上り、端部は丸味をもっている。底部はヘラ切で下る。高台部は短い。	灰色
須恵器 有蓋 杯身	挿 12の8	口径12.5cm 高さ5.6cm	口縁部が内反する。端面が鋭く、内面がけずられている。受けが斜上にのび、体部の上部に沈線がめぐらされ、底部は扁平である。	褐色である。
須恵器 平瓶	挿 12の9 図6	残存高13.8cm	口縁部が外反し二条の沈線がめぐらされている。胴部は肩の部分が丸味を持っている。	茶褐色
須恵器 高杯	挿 12の10	残存高6.3cm	脚部で沈線が見られる。	灰色
土師器 壺	挿 12の11	口径24.8cm 残存高5.6cm	口頸部が肥厚し、外反し、端部は丸くおさまり、胴部は口径より開き斜めに刷毛目が見られ、内面に横に刷毛目が施されている	褐色
須恵器 有蓋 杯身	挿 10の8-10 11の7		小破片であるが有蓋杯身である。	灰色及び鼠色。

(大江 命)

插图9 出土器类测图

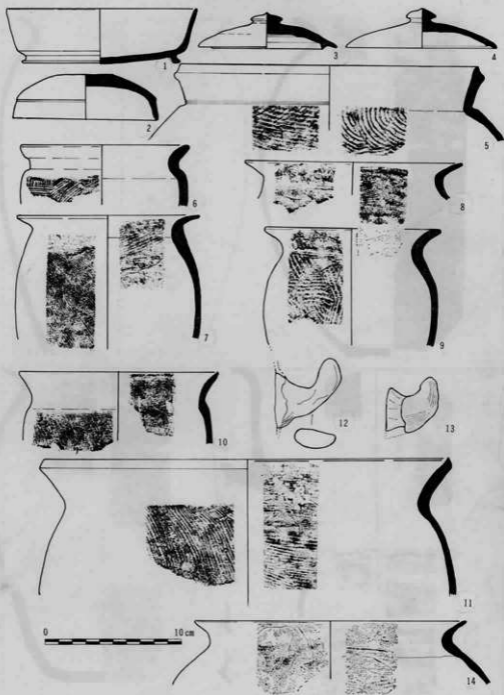


插图10 出土土器实测图

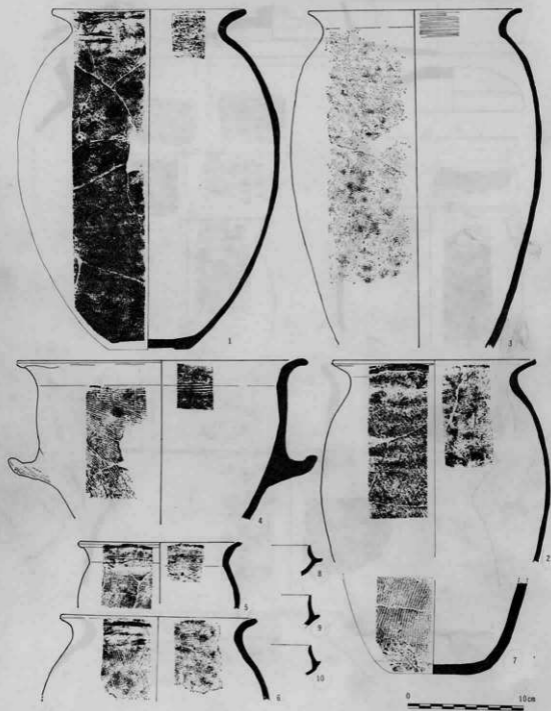


插图11 出土玉器测图

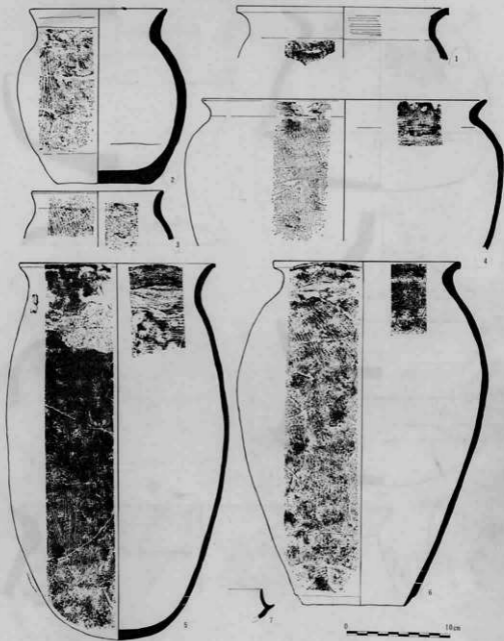


插图12 出土石器实例图

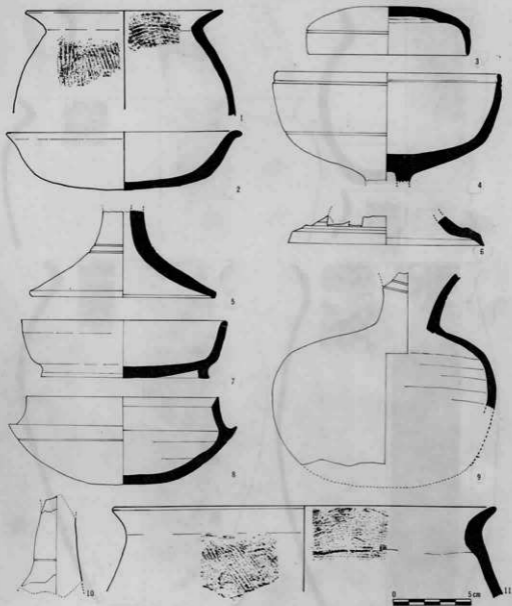
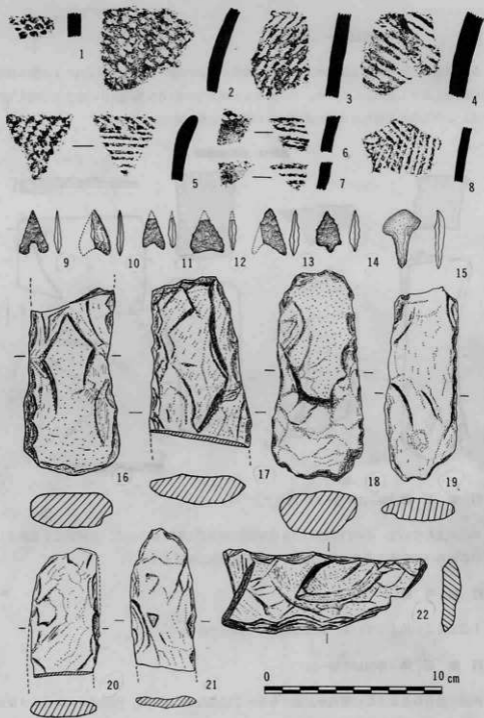


插图13 出土石器·石器实测图

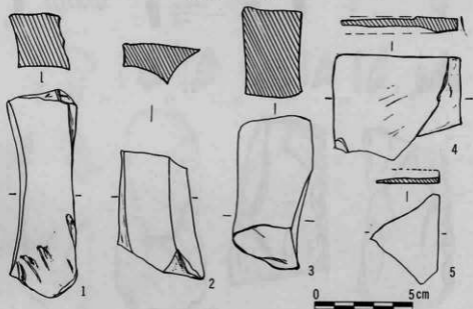


石 器 類

砥 石 (挿図14の1~5, 図版7)

5点出土している。第1住居址より平たい板状のものの破片2点と、挿図14の1が第6住居址の西壁上より1点出土している。そのほか1と同じものがB3-7, 2A6の地点より出土している。この3点は2面及び3面が非常によく使用され弧状をなしている。

挿図14 砥石実測図



打製石鏃 (挿図13の9~14, 図版7)

6点出土していて、その内挿図13の9は早期に伴出する鏃形鏃である。有柄鏃は1点出土している以外は有脚鏃である。石質はチャート黒雲母安山岩である。

打製石鏃

1点であるが出土している。石質は黒雲母安山岩である。

打製石斧 (挿図13の16~21)

挿図に見られるような打製石斧が破片も含めて15点出土している。石質はホルンヘルスを用い、短冊型の器形をなすものである。

その他の石器

挿図13の22は打製石斧とは異なり、打製であるが一方が弧状になりその部分に刃部が付けられている。

土製品

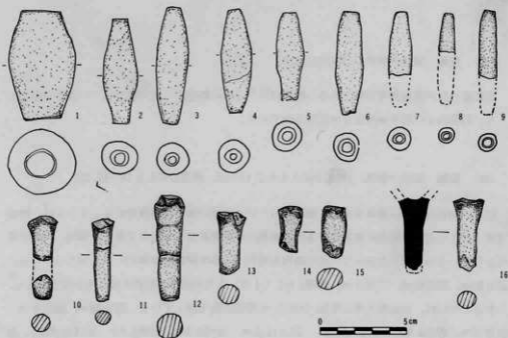
土 鍾 (挿図15)

破片を含めて22個体分出土している。大型のものと、胴の張ったずん胴型のもの、胴の張らない細長いものの3種が出土している。大型のものは1個で1B12の陶磁器片中より出土している。ずん胴型のは2C2で16点、出土している。胴の張らない細長の型はA4・A5で5点出土している。

細形角状脚台

挿図15に見られるような棒状であるが、その上部は欠失して不明である。細形角状脚台のようなものが、第1住居址で3点、第2住居址で1点、第3住居址で2点出土している。

挿図15 土製品実測図



江戸後期・明治の出土遺物

出土遺物について

出土遺物は、幕末から明治頃の陶器商の荷くずれ品の陶片と考えられるものが第5住居址の所に検出された。その中に可見郡小名田村「倉」慶応元年銘入の灰釉徳利が知られる。これ等の徳利類は主に小名田、高田（現在多治見市）の物が多く、可見町大平の灰釉徳利は比較的少ない。磁器、半磁器類は江戸後期から明治頃の可見町大平、土岐郡笠原町、土岐市、多治見市、可見町久々利窯の物と類似している陶片が出土した。川合には美濃各地の陶器の集積地であったので、総合的には、土岐、多治見、可見の窯業地の陶磁器類である。その種目は、灰釉系徳利、鉢、灯明台及び仏器類、洗紙釉徳利、小皿、鉄釉徳利、灰釉茶壺、摺鉢、小盃、小形植木鉢、その他が出土した。これ等の遺物中陶磁器を釉薬によって分類すると、御深井釉末期の、白釉、灰釉、洗紙釉、鉄釉、染付、黄瀬戸緑釉垂らし掛け、御深井釉鉄釉掛け分け、白釉鉄字の8種類に大別することが出来る。その他一点のみ絵志野唐草模様江戸初期の陶片があった。

(イ) 白釉（御深井釉系）（挿図16の2.9）

長石質の江戸後期御深井釉である。灯明台及び小皿、油壺小などに施されているものが出土した。灯明台は口径8cm高さ6cm底径6cmである。

(ロ) 灰釉（御深井釉系）（挿図16の3.4.6.7.13~22, 挿図17の2.3.15~17.25）

江戸中期頃の黄瀬戸菊皿手小皿に施釉されていた黄瀬戸釉が江戸後期になってからは、棚焼で焼くようになり、急速に温度が上がるので黄瀬戸が灰釉になったものである。徳利、大鉢の量産をしているので、したがって川合の遺物も徳利大中小や深鉢類が量的に多く出土している。高さ23cm、底径10cm、口径3cm、容積1.8ℓ（1升）入りの灰釉系徳利の陶片もかなり出土し、これらの中には、可見町大平の享和（1802）年間頃の物も混っている。高さ22cm、底径8cm、口径3cm、容積0.9ℓ（5合入実測）。高さ10.5cm、底径6.2cm、容積0.6ℓ（約3合実測）。高

さ19cm、底径6.2cm、容積0.5ℓ入り(約2合5勺実測)。0.9ℓ、0.6ℓ、0.5ℓ入の灰釉徳利類は、万延1(1860)年～慶応4(1868)年頃の小名田、高田あたりの徳利である。灰釉の耳付壺(茶壺)、尿瓶、片口、丸碗、線香鉢、その他の灰釉は、享和(1802)～慶応(1868)年頃の物と推定される。

(ハ) 洗紙釉 (挿図17の8.10)

洗紙釉で特に多く出土したのは徳利であり、高田、市ノ倉あたりの物と推定される。高さ23cm、底径7.5cm位のものが多く、殆ど完器がないので実測は出来ない。推定では、1.8ℓ(1升)、0.9ℓ(約5合)、0.6ℓ(約3合)、0.5ℓ(約2.5合)入りの物が多く、1.8ℓ以上の特大徳利は出土していない。その他には油壺、小皿が出土している。

(ニ) 鉄釉 (船釉) (挿図16の1.6.8, 挿図17の4.7)

川合出土陶器のうちで最も古いのは、江戸前期寛永(1640)年～天和(1681)年頃の1.4ℓ(約7.5合)入の徳利がある。その他、天保(1840)年～1865(慶応)年頃の落合徳利風の大平徳利と灰釉徳利風の鉄釉徳利が出土して船釉線香鉢もある。灯明台は、口径6cm、高さ4.5cm、底径4.5cmが出土した。

(ホ) 半磁器及び磁器 (挿図16の5.10.11, 図版9の5.6.13.17.18)

美濃における染付は、慶長(1610)年頃の久尻元屋敷、窯ヶ根、大平清太夫窯から初まっている。半磁器では川合で出土したものは、1780(安永)年頃の徳利の陶片が最も古く、半磁器では(1780)安永から1805(文化)年頃の碗、皿類が出土している。笠原町、可見町大平、多治見市方面の物と思われる磁器も碗皿類が出土し、土岐市妻木、可見町大平、多治見市の文化(1805年)以後のものから安政年頃の摺絵の久々利窯の製品もあり、高田の半磁器鉄絵の草模様の皿も出土している。

染付を見ると半磁器の徳利陶片2個見られる。柳絵碗は御深井釉に山呉須で口径11.5cm、高さ6cm、高台径6.4cm。唐草模様中皿は口径14cm、高さ4.3cm。草模様小皿は口径9.5cm、高さ2.1cm。松竹梅鶯模様碗は口径3.2cm、高さ2cm、高台径12cm。花唐草碗は御深井釉山呉須で口径12.2cm、高さ6cm、高台径8cm。

磁器の花連続模様碗は口径9cm、高さ5.6cm、高台径5cm。松竹模様のは口径6cm、高

插图16 陶磁器实测图

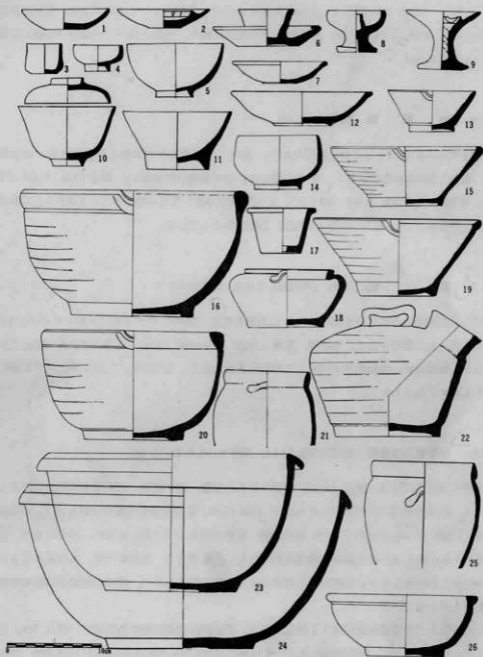
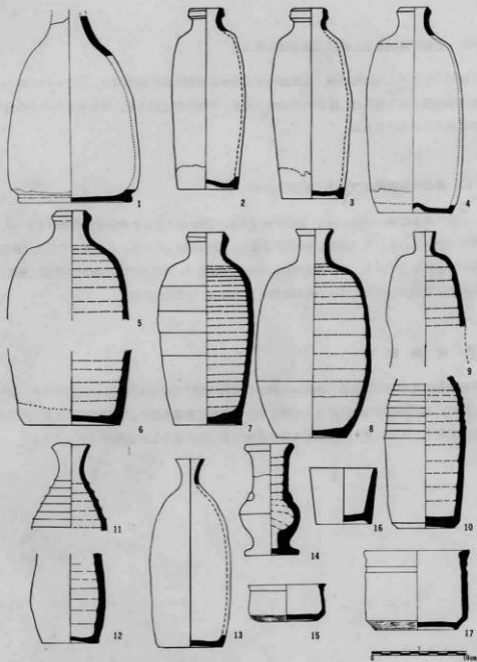


插图17 陶器实物图



さ 8 cm, 高台径 3.4 cm。

(へ) 黄瀬戸緑釉垂らし掛け (挿図16の23, 24)

口縁部が外にそった口径 35 cm, 底径 15 cm の大深鉢に黄瀬戸釉に緑釉垂らし掛けの物がある。黄瀬戸釉の調子から見れば、江戸中期 1688 (元禄) 年頃の物と思われ、可見町大平か多治見市小名田あたりのものである。

(ト) 御深井釉鉄釉掛け分け (挿図17の14)

仏花器で高さ 12 cm, 口径 6.5 cm, 底径 6 cm のもので鉄釉を下から 8 cm 程掛け白釉は上から 7.5 cm 程下へ掛けているので、中間 3.5 cm 程が重なり、鼠色になっている。したがって白色、鼠色、鉄色の 3 色になっている。この仏花器は、土岐市下石町や、小名田で江戸時代中後期に盛んに焼かれているが、川合のものは小名田の作と思われる。(挿図16の14)

(チ) 白釉鉄字

灰釉徳利の最末期の慶応元 (1865) 年頃から徳利に鉄字で屋号を描く事が流行するが、明治 20 (1887) 年頃から徳利の口造りが変わり灰釉から白釉に釉薬も変わり、徳利の胴には村の名や屋号を必ず記すようになる。多治見市高田が産地であった川合のものは陶片ばかりである。

考 察

江戸後期の大平窯古文書によると、1升徳利、5合入徳利、3合入徳利、2合入徳利、大口、茶漬茶碗などを大平より河合まで駄馬で送り河合より名古屋の堀川まで舟で送っている事が記されている。又江戸後期は可見郡徳野村陣屋の笠松役人が、多治見、滝呂、笠原、高田、市之倉などの窯元を支配していたが製品は、可見郡の川合（現在可見町川合）に集積され、木曾川を舟で下って、名古屋堀川のほとりにあった名古屋藩の米蔵のあき蔵に納められたが、天保頃になると多治見の西浦丹治も美濃窯を支配するようになって、川合は東濃窯業製品の集積地として木曾川を下って直接桑名港へも積出しするようにもなった。川合出土の陶片は当時の陶器商の廃棄物と考えられる。（稲垣雄之助）



挿図18 徳利底部、墨書「可見郡小名田村傳慶応元年」

結 語

今回の川合遺跡の調査によって、縄文時代より歴史時代に亘る資料を得たのである。これ等の資料を総括して考察する。

先ず遺跡の中心となった7～8世紀代の住居址が8基検出されたのである。プランの明確にされたものを見ると、長方形のプランを示すものが第1・2号住居址であり、カマドの位置は北壁に沿い見られる。次に方形を示すものは、第4・5号住居址であり、第4号住居址のみ北壁にカマドの位置が見られる。

他の住居址は、明確なプランを検出することが出来なかった。しかし、方形または長方形のプランを示すものである。これらの住居址はいずれも黄色シルト砂層を掘込んで構築されている。

次に住居の切合関係は、第3号住居址を第2号住居址が切っている。従って、第3号址が第2号址に先行するものである。

第4号址と第5号址の関係は、第5号址が第4号址を切り、第4号址が先行するものである。

その他の遺構として、溝状遺構が第1地点、第2地点で見られた。第2地点はその保存状態もよくなく、木曾川に向かって陸水が流れたような状態で形成されたものでなかろうかと思考される。従って住居址の遺存状態も悪くなっている。次に土壌であるが、第1地点のD1、第2地点のD2・3は、近世の野菜貯蔵址である。D4は一応大きな土壌であるが、攪乱されていて、年代もプランも明瞭ではない。

遺物は、縄文時代早期の押形土器及び石器類が少量出土している。この付近(遺跡の東部)に縄文時代の散布地の中心が知られる。また弥生式中期初頭の土器片が数点出土している。

さて、遺物は本遺跡の中心となった土師式土器と須恵器である。須恵器の中には6世紀代のもも含まれている。これはこの付近には6世紀代の古墳またはそれ以前の古墳が知られる地域であるので、6世紀代の遺物が出土するのも当然である。住居址の時期については各住居址の所で述べたが、資料の多少の差はあるが土師式土器、須恵器、住居址のありかたより7・8世紀代の時期と推定される。遺物の中でも注意を引くものは、須恵器では、天井部に宝珠状ツマミを有し、口縁内面に返りを有する蓋である。これ等は器形上、7世紀代に含まれると考えられるが、8世紀初頭まで生産されたとも考えられ、今後この器形の下限について問題があると思われる。土師式土器は、中部山岳地帯の第Ⅲ型式^{注1}の推移の中で岐阜県の編年の上で注目さ^{注2}

れる資料である。また、細形角状脚台に類似する土器は、^{注3}その用途と分布圏の上で一つの課題を提起する。その他土鍾であるが三形式知られている。

これ以外に小破片であるが、鎌倉期の白瓷系の碗が出土している。^{注4}江戸期より明治にかけての陶片であるが、これ等の陶片は第5住居址の一部に埋められたもので、江戸後期より明治にかけて川合に陶器問屋があり、ここより本曾川を利用して各地に送られたことが文献によって知られる。^{注5}その時期の荷くずれ品の捨場と推察される。これ等の遺物は当時の生産地と窯業の研究の上で好資料である。

上記のような貴重な資料中、特に古代史の研究の分野の考古資料が少ない岐阜県においては注目すべきである。 (大江 命)

注1 岐阜市の朝倉古窯址群中に天井部に宝珠状ツマミを有し口縁部に返しのある蓋が出土している。又老洞古窯址群等の研究調査によって時期がかなり明確にされよう。

注2 玉口時雄筆「古墳文化特説」土師器

注3 近藤義郎「製塩」日本の考古学V 河出書房(昭41)。愛知県知多郡美浜町教育委員会(1972)奥田製塩遺跡(参照)

注4 白瓷系の碗は破片であって実際に耐えがたい小破片である。

注5 岐阜県史(岐阜県)

圖 版



発掘以前の遺跡の全景



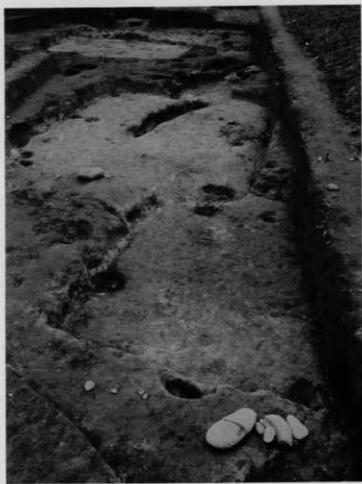
発掘調査中の状況(南方より)



第1地点C11の層序(第4住居址)



第1号住居址全景



第2、第3号
住居址全景



第4、5号住居址全景



第6号住居址全景



第7号住居址全景



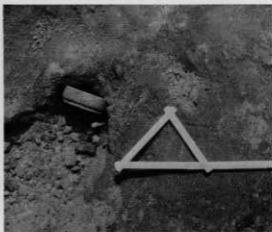
第4号住居址カマド附近の甕の出土状態



第5号住居址の陶磁器片の出土状態



第8号住居址の甕の出土状態



第6号住居址砥石の出土状態



10の1

11の6



11の5



10の3



9の1



12の9



12の7



10の7

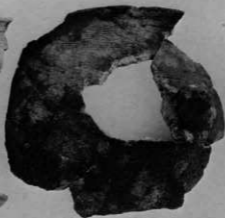
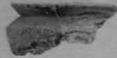
10の5



11の3



9の6



10の4



10の4



11の2



石鏃および
石鏃

砥石



土鏃



細形角状脚台



縄文式、弥生式土器片



1



2



3



4



6



5



7



8



9



10



11



1

2



3



4



5



6



7

8

9

10



15



11

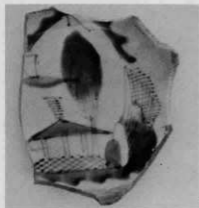
12

13

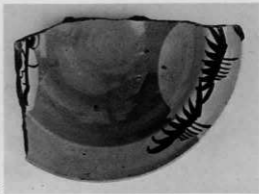
14



16



17



18

川合遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月20日 印刷

昭和53年3月25日 発行

発行所 可兒町教育委員会
岐阜県可兒郡可兒町
教育委員会事務局
電話(05746)2-1118番

印刷所 燈 舎
京都市山科区四宮一燈園内
電話(075)581-2901号
